

本草綱目における紫鑛

岳川 有紀子*

概要

1596年に明で出版された薬に関する書物「本草綱目」は、中国の本草学史上もっとも充実した薬学著作で、収録薬種は1892種、図版1109枚、処方11096種にのぼる。今回、国立国会図書館に収蔵されている本草綱目（初版）において、「紫鑛」の項があったので、その解説、図版などについて報告する。

1. はじめに

「本草綱目（ほんぞうこうもく）」は、万暦18（1590）に明（現在の中国）で出版された薬に関する書籍で、作者は李時珍（りじちん）、図は李建中（りけんちゅう）が担当した。全27冊で、現存の完本（多少の補写を含む）は世界で7点、うち4点が日本にある。

本草学史上において、分量がもっとも多く、内容がもっとも充実した薬学著作であり、日本においても当時から薬学書の基本として長きに渡り影響を及ぼしてきたとされている。

昆虫「ラックカイガラムシ」が分泌する天然樹脂様物質は、「紫鑛（しこう）」という名で正倉院宝物のなかでも薬品として所蔵されている*¹。紫鑛は図1のように、枝に昆虫とその分泌した樹脂状物質がかたまった状態のもので、現在は「スティックラック」と呼ばれている。また、スティックラックの樹脂状物質のみを精製したものを「シェラック（セラック）」と言う。

今回、「本草綱目」に「紫鑛」が掲載されているか、ま



図1. スティックラック（大阪市立科学館蔵）



図2. 正倉院宝物「紫鑛」（宮内庁正倉院蔵）

た、どのように記述されているかの調査を行なった。今回は、国立国会図書館において公開されている資料を参照した。

2. 本草綱目の紫鑛（しこう）

前述のとおり本草綱目は全27冊あり、国立国会図書館において初版本が公開されている。そのすべてに目を通したところ、第39巻16,17ページで紫鑛の項があった（図4, 5）。

2-1. 紫鑛の記述

中国の書物なので、当然、本文は中国語で書かれている。文中、大きな文字で書かれている項目が特に重要な内容であると考え、それらを可能な限り解説したものを以下に報告する。

*大阪市立科学館 学芸員／中之島科学研究所 研究員
takegawa@sci-museum.jp

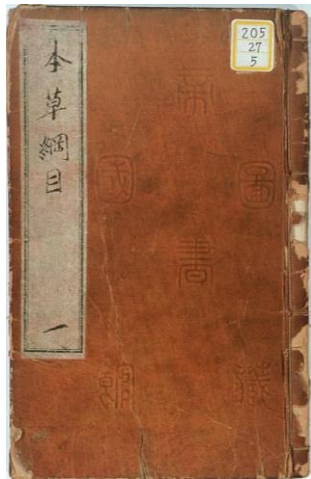


図3. 本草綱目(初版)表紙(国立国会図書館)

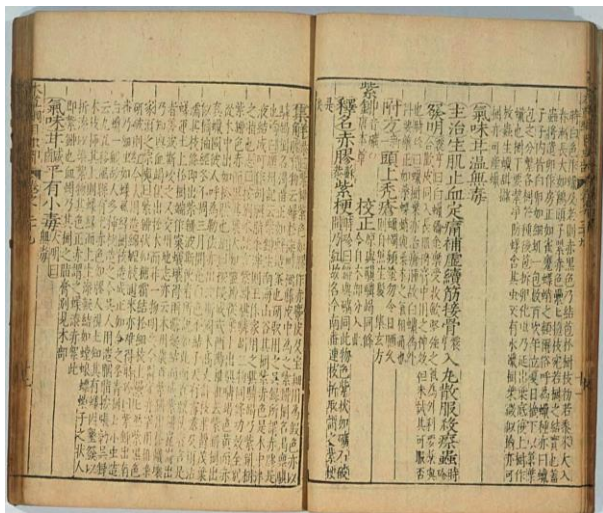


図4. 第39巻の16-17ページ。16ページの最後2行目から紫鑛の項目がはじまる。(国立国会図書館)

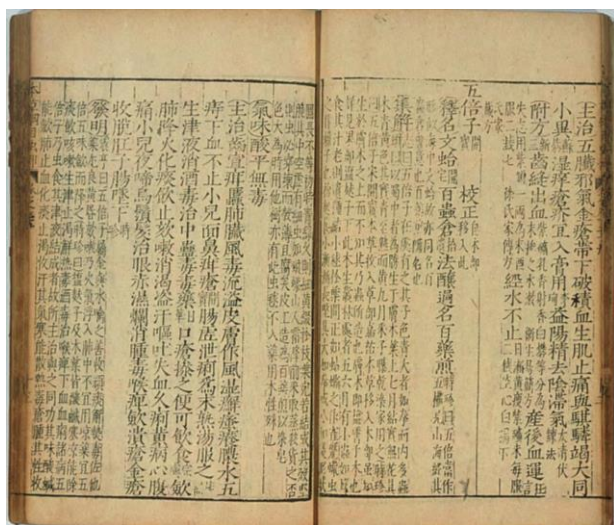


図5. 第39巻の18-19ページ。18ページの真ん中あたりまでが紫鑛の項目。紫鑛の次項目は「五倍子」。(国立国会図書館)

表1. 本草綱目の紫鑛の記述(抜粋し意訳)

紫鑛
釋名(別名) 赤膠(赤いにかわ)
氣味(性質) 甘塩味で潤す働きがあり体の中に作用し少し毒がある
主治(主な治療) 五臓邪氣(五臓(肝・心・脾・肺・腎)を健康に保つ
附方(別の処方) 齒縫出血(抜歯した後の出血を止める)など

表1は、文中で大きな文字で書かれた部分を中心に抜粋、訳したものである。

別名が赤い膠、というのは、ラックカイガラムシの体内には染料としても利用できる赤色の物質があり、手で潰すと指が赤く染まることから、この別名が付けられていると想像できる。

なぜこうした効能があるのか、こうした効能がどのように発見されるに至ったかについては、わからない。

2-1. 新訂和漢薬^{*2}(1970年)との比較

新訂和漢薬は、現代の「本草綱目」と評される和漢薬の書籍で、約2,900の和漢薬を植物、動物、鉱物に大別して解説している。

「動物」に分類された紫鑛(紫鉱)は、926-927ページに掲載されている。(表2)

表2. 新訂和漢薬の紫鑛の記述(抜粋)

紫鉱
作用 小毒有 破積血、止痛、生肌、
応用 五臓邪氣、産後血運、齒縫出血、咽喉弛腫
成分 樹脂、色素

本稿の参考文献のなかに「本草綱目」とあるので、表1と表2の内容がほぼ同一であるのは当然であるが、和漢薬の世界では、現代でもスティックラックが薬として扱われていることがわかる。

参考文献1でも報告しているが、五臓を健康に保つことに有効とされる薬物として、現代のカンボジアでは滋養強壯のために普通に利用されている^{*1}。

3. 紫鑛の図版

本草綱目には、掲載されている薬物のもととなるものの絵が、附図巻として存在している。

附図巻(上)32ページには、紫鑛の絵が描かれている(上段中央)。木の枝が「スティックラック」になっているようすが描かれている(図6, 7)。

初版本では著者、李時珍(りじちん)の息子、李建中

(りけんちゅう)が描いたとされているが、全般に稚拙と評価されている。筆者はこの評価を知る前にこの図版を見ていたが、稚拙といよりも、敢えて単純に描いたのだろうと感じた。セラックは、直径1cmほどの枝のまわりに、昆虫の分泌物が厚さ1cmほどで取り囲んでいる(図8)。よく言えば、その特徴をよく捉えて描かれていると言える。

現在、セラックはタイやインドなど熱帯地方で養殖されているが、当時も明の地域の北緯では産出しないと考えられるので、李建中が何を参考にして、この絵を描いたのか、関心があるところである。この点については、今後の調査としたい。

稚拙と評価された初版本の図版は、この名著にはそぐわないという理由で、後の版では描き直されているということである。

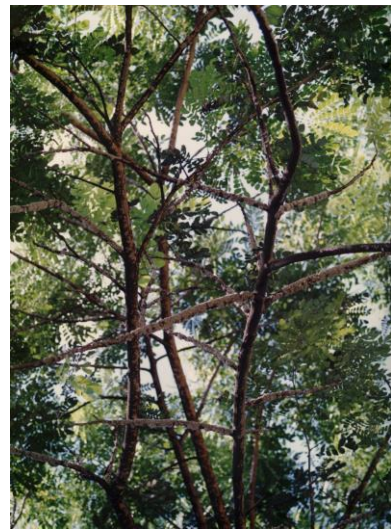


図8. 実際の木の枝に分泌物が付くようす(株式会社岐阜セラック製造所提供)



図6. 附図巻(上)32-33ページ。32ページの上段中央が紫鑛の図。(国立国会図書館)



図9. 図8を拡大したもの。図7と比較すると、図7は特徴を捉えて描かれているとも言える。



図7. 紫鑛の図のみを拡大。「紫梗」の文字が書かれている。(国立国会図書館)

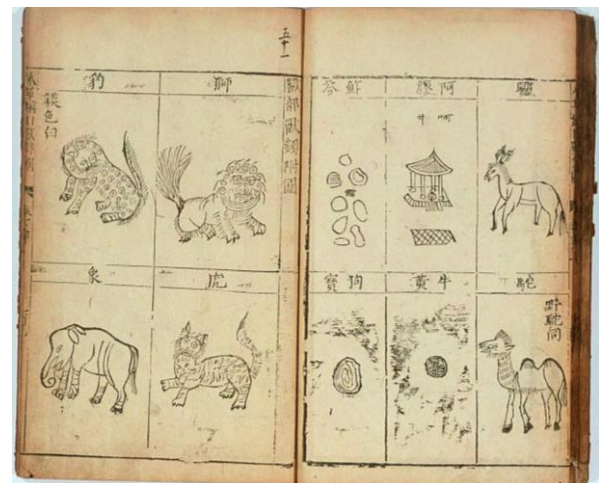


図10. 象や虎、らくだなど動物が描かれたページ。稚拙と言われるとそのようにも見える。(国立国会図書館)



図11. 図9の象の図のみを拡大。(国立国会図書館)

4. まとめ

紫鑛が、いつから、なぜ薬として扱われるようになったのかを知ることは、現在、紫鑛が世界中でシェラックとして主に樹脂(プラスチック)としての用途に変わった過程を知ることにつながると考えている。

薬品については、古い文献も多く残っているため、今後も引き続き調査を行なっていきたい。

参考文献

- 1) 岳川有紀子, 「天然樹脂状物質シェラックの利用 - 正倉院宝物と薬効を中心に-」, 大阪市立科学館研究報告第20号, 65-70 (2010) http://www.sci-museum.jp/files/pdf/study/research/2010/pb20_065-070.pdf
- 2) 新訂和漢薬, 赤松金芳著, 医歯薬出版株式会社, 1970年4月発行